平成ＧＨＯＳＴ★ＢＡＳＴＡＲＤ

政咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平成ＧＨＯＳＴ★ＢＡＳＴＡＲＤ

【Ｎコード】
Ｎ５８８９Ｐ

【作者名】
政咲

【あらすじ】
その日、私は幽霊を見た・・・

Part1 I saw the ghost on the day1／2

彼女がこの状況を理解するのに時間は掛からなかった。
だが、余りにも非現実的すぎる状況を受け入れる程、彼女の頭は柔軟ではい。
自身の知る世界の全てを、たった一日の出来事で覆されてしまう。
彼女はそれを受け入れるにはまだ幼すぎる。彼女にその自覚が無いとしても。

この一日が終わったとしても、彼女に置かれた状況に変わりは無い。
彼女が目に見える全てに疑いを掛けて常に自身を警戒して生きて行く事は確実だろう。
恐怖に恐れを抱く限り、延々と続く空想の中で彼女はその身を実感する。
避けられる事の無い道の途中に、相手の存在を知って、自身の存在に疑問を抱く。
しかし、彼女にとって意識する事は別にあった。

人が自然と何かに引かれ何かから離れていく様に、彼女にも引かれる何かがあった。
それは、現実離れした空想には無く、延々と繰り返される恐怖にも無かった。
彼女自身がその何かを得る事は決してない。彼女はその存在に気付いていない。
それは、彼女が理解し難い状況に置かれた時の救いとなってくれる。
それは、空想に置かれた彼女の日常を自然と大きく蝕んでしまう。
今の彼女がそれを受け入れるには、それ暫くの準備が必要になる。
その間に起こる事は彼女の準備を手助けしてくると共に、彼女の成

長に繋がる。

彼女の抱える恐怖が、時と共に自然と消える事は無い。
恐怖を消すには相応の希望が必要である。彼女が持つ恐怖は大きい。
それを消す為の存在に出会えるかどうかは、彼女の行動次第である。
その恐怖を増幅させるのも、彼女の行動次第とも言える。

空想を知り崩れかけた運命が、元の形に戻る事は決して無い。
だが、崩れた形を新たに作り変える事は出来る。彼女はそれを行うのか？
恐怖を知って、引かれる何かを追い求めて、変わり果てた状況を変えるのか――

――これ話は、そんな彼女を通して送られる一年間を書いた物語である・・・。

『その日、私は幽霊を見た』

―◇―◆―◇―◆―◇―

私は誕生日を迎えて１２歳になる。その誕生日は今日だった。
仕事で忙しい両親からの誕生日プレゼントは現金が入った封筒とメッセージカード。
カードには「誕生日おめでとう。夕衣（ゆぃ）は大人だからこれで好きな物を買いなさい」と細々に書かれていた。『大人』・・・その言葉が頭の中で繰り返しに再生されている。

「ねぇ・・・大人って何なの？」

私が小学生になったばかりの頃に父へ聞いた言葉。その時から父は仕事で忙しかった。
社長に主任したばかりの父は慣れない環境に疲れを感じている。当時の私でも解る程に。
それでも父は私の前で疲れた素振りを見せなかった。でも、酒の量は多くなった。
「大人？　そんなことを聞いてどうするんだい？」
「別にどうするつもりは無いけど・・・気になって・・・」
私は顔を下に向けてビール缶を何本も飲み干している父の横に立っていた。
確かにどうするつもりは無かった。仕事に疲れた父から一言でも声を聞きたかっただけ。
父は私の言葉を聞いて眉間に皺を寄せる。その時の父の顔が学校の先生と似ていたので、私は思わず笑い出しそうになった。必死に笑いを堪えている私を目に父はこう言った。

「心の有様の事だと思うよ。自分が大人だと感じたらその時が大人さ・・・」

当時の私には父の言葉が全く理解できなかった。大人と感じたら大人・・・
「じゃあ、夕衣もすぐに大人になれるの？」
疲れ気味に微笑む父に私はこの質問を投げつけた。
でも父は何も言ってはくれなかった。私に揺さ振られながらビールを飲むだけ。

１２歳を迎えようとしている私には、不思議とこの言葉を理解することが出来た。
大人と子供の境目なんて、こんなにも単純で簡単なものだったんだ

と実感している。
私は自分をまだ大人だと認めている訳ではないけど、いつまでも子供でいる気も無い。
そうだとしたら、今はその境目の中心を行ったり来たりしているのかもしれない。
今の私にはハッキリとした答えが欲しかった。今の私は何？　大人？　子供？
自問自答に答えを導き出そうとしても無駄だった。悩んでいるのはこの私だから。
あの時、あの質問をした人が父では無かったら・・・・・・私は・・・・・・――

「――・・・お客様？」
＜赤姫夕衣（あかひめゆい）＞は駅前の小さなファーストフード店の中で憂鬱な考えに浸っていた。
レジ前の店員が茫然と立っている彼女に目を向けている。今は注文の最中だった。
赤姫は慌てて店員に飲み物の注文をして、代金は誕生日プレゼントで支払った。

―◆―◇―◆―◇―◆―

＜締袖県（しめそでけん）＞の＜星の宮市（ほしのみやし）＞にある小さな町＜敷涙町（ふるいちょう）＞が赤姫の住んでいる町である。
赤姫が今いる駅前の雑貨通りと比べて、人通りが極端に少なく寂れた古い町だった。
若い人達は挙ってこの町を嫌い隣の町へ遊びに行く。赤姫もその一人であった。
隣町の＜笹下町（ささしもちょう）＞は都街であり大型百貨店やオシャレな雑貨店が並ぶ通りが多い。

「・・・・・・どれにしよう？」
私は駅の近くにあった小さな楽器店に居る。自分のギターが欲しかったから。
店の中に飾られていた楽器を目にして自然と体が店の中へ入って行った。
ガラスケースの中に飾られた新品のギターの値札を見て買える範囲の物を探している。

今まで私が弾いてきたギターは母が近所の交流バンド会で使っていた物ばかりだった。
小学校の母親交流会がきっかけでギターを始めた母を見て私もギターを弾いている。
まだ上手には弾けないけど、何も考えないでギターに集中している自分が好きだった。
迷ってばかりで物事の選択が下手な私は、母が使い終わった後のギターを手に取ってこっそり演奏の練習をしていた。そんな私を見ても母は一言も私に声を掛けてくれなかった。
今日の今まで私はそうして親の後ろ姿を見て私は成長してきたんだ・・・――――

「――気に入った物はあったかい？」
楽器店の店員の声に驚いた私は目を大きく丸にして店員の顔を見た。
その店員も私の反応を見て驚いている。恥ずかしさで自分の顔に熱が籠る。
「えっ！？・・・ええっと・・・」
「ああ、ごめんね。変に真剣な顔で商品を見ていたから・・・」
この言葉を聞いた途端に走って逃げ出したい衝動が全身を駆け巡った。
私は選択下手な上に緊張と失敗に弱い人間でもある。ううっ・・・

今すぐに泣きたい。
「君、楽器を買うのは今日が初めてだろう？」
「え・・・どうして分かったんですか？」
「長い事この仕事をやっていれば分かる様になるんだよ。ハハ・・・」
私に声を掛けてきた店員は、厚いサングラスを掛けた太いおじいさんだった。
その人の優しそうな笑顔に心が救われる。今思えばこの店にはこの人しか居なかった。

「ところで、君はどうしてギターを買うんだい？」
ケースから外に出されたギターを手におじいさんは私に質問して来た。
私が選んだ赤いギターは、奇抜な形をしていたので座って弾くのには難しい代物だった。
逆に立って弾くにしても私の身長にギターは合わない。それでも私はこのギターを選んだ。
おじいさんに何度もこれでいいのかと聞かれたけど、私は黙って頷くだけだった。
「えっと・・・理由ですか？」
おじいさんの質問に答えようとした時、胸の奥で何かが私を締め付けるのを感じた。
難しい質問を受けている訳でも無いのに・・・正直に話すだで良いのに・・・。
「その・・・親が使っていた物ばかり弾いていたから・・・自分のギターが欲しくて・・・」
服の胸元を摘まんでモジモジしている私を見ておじいさんは太い眉を眉間に寄せた。
厚いサングラスのせいで表情がよく解らない。もしかしたら笑っているのかも。

「じゃあ、どうして自分のギターなんだい？」
「え！？　それは・・・・・・――」
言葉が詰まったのと同時に胸を締め付ける感覚が消えた。その変わりに声が出なくなった。
自分のギター・・・その言葉を考えるだけで喉から出る声が詰まった。どうしてなの？
「――ハハ。ごめんね・・・うん。君は僕と似た所があるね」
おじいさんの声を聞いた途端に喉の詰まりが消えた。荒い息が胸の奥から込み上げてくる。
突然、喉の詰まりが消えた理由としては、私がおじいさんのある言葉に引かれたから。
「似た所・・・ですか？」
「思えば、僕が初めてギターを買ったのは君位の時だったね」
おじいさんは厚いサングラスを顔から外した。焦点の合わない小さな瞳が私へ向けられる。
「あの時は・・・そうだ親も一緒にいたね。君の様に無茶なギターを欲しがっていたね」
「その頃は嫉妬していたんだよ。上手にギターを弾ける親にね」
「・・・親に・・・ですか？」
私は母に嫉妬の念は抱いてはいないけど、もっと自分を見て欲しいという気持ちはあった。
「あの時はまだギターを手に持った事も無かったよ・・・それで意地を張っちゃってね」
「そのギターは買ったんですか？」
「いいや・・・親に罵倒されてね、弱腰になっちゃったよ」
おじいさんは近くにある椅子に腰を下ろす様にと私に言ってから店の奥へ戻って行った。
数分で戻ってきたおじいさんの両手には、白い湯気が上がったマグカップが握られている。

「でもね、そこの店員の人がやさしくてね。別のギターを半額で売ってくれたよ」
おじいさんはそっと私にマグカップを渡してくれた。香り立つ湯気が鼻を刺激する。
中に入っていた飲物はミルクコーヒーだった。一口で砂糖が多く入っているのが解る。
「それでね、その店の人に君と同じように聞かれたんだよ」
「・・・何を聞かれたんですか？」
「『どうして君はギターを買うのかい？』てね」
あの質問はおじいさんも受けたものだったんだ・・・でも、どうして同じ質問を私に？
「・・・それで、答えられたんですか？」
「最初はギターが好きだからって言ったけど、次の質問が来てね・・・」
「『どうして自分のギターなのか』ですか？」
「うん。それだよ」
その質問には私も答える事が出来なかった。『自分のギター』という言葉から来る妙な詰まりが私の声を喉の奥へと押し込んでいった・・・あの時の私はどうかしていたんだ。
「答えたくても、答える事が出来なくなったんだよ。君もそうだろ？」
その言葉を聞いた私は慌てて冷めたミルクコーヒーを口から喉へ一揆に流し込んだ。
コーヒーとミルクの甘苦い風味を舌で感じる事が無いままにカップの中は空になった。
「君もそうだろうって・・・何で分かるんですか！？」
「ハハハ。慌てる気持ちも分かるよ」
私の反応を分かっていた事の様に楽しんでからおじいさんはカップのコーヒーを飲んだ。
おじいさんのコーヒーは色からして苦いブラック。私はそっちが好

きだったのに・・・
「答えを知らない訳でもないのに声が出なくなるんだよね。僕も始めは不思議に思っていたけど今からして思えば、あれは自分が言いたくなかっただけなんだよね。口の変わりに体がそれを教えてくれるのさ。変な胸騒ぎの後にそう成っただろう？」
私は何も言えなかった。おじいさんの言った事が当たっていたから・・・。
母にギターを弾いている私を見て欲しかった・・・父に・・・あの言葉を考え直してほしかった・・・こんな個人的な事は何も知らない他人に話してもどうにもならない。
「人に言いたくないって感じよりも、他の人に言いたい事って感じの方が強いかも・・・」
「そうかい・・・それでいいと思うよ。悩みを抱えてギターを買っても上手くはならないからね。君を見た時にすぐに分かったよ」
・・・・・・え？
「君って考え事が顔に出る人間だろ」
「そ・・・そうですか？」
「おや、どうしたんだい？　顔が真っ赤だよ？」

「いっ・・・いえ何でも・・・」

―◇―◆―◇―◆―◇―

恥ずかしい・・・その気持ちで破裂寸前だった。
顔で何を考えているのかが解る・・・私ってそんなに単純な人間だったの？
「ハハ。あんまり気にする事じゃないと思うよ」
ああ・・・また考えている事が顔に出てる・・・もう嫌になっちゃう・・・
「これでよしと・・・それじゃあ、明日辺りには届くと思うからね」

普通の客だったら買った楽器はそのまま持って変えると所だったが、私はギターケースも何も持っていないので宅急便で送ってもらう事にした。送料はおじいさんが払ってくれる。
普通は客の方が準備してくるのに、私って本当に駄目だな・・・。
「ほらほら、いつまでもクヨクヨしているとギターが勝手に逃げちゃうよ」
「え？　ギターって逃げるんですか！？」
「自分の主人が元気のない人だったら何だって逃げるさ。元気を出して！」
「・・・・・・は～い」
気の抜けた返事と共に私はソファーから立ちあがる。短い身長で背伸びをしてから深呼吸をした。実際の所はそんなに落ち込んではいない。おじいさんの御蔭で私の気持ちが解ったから・・・自分を知れた事にはおじいさんに感謝しています。でも・・・
「次に来た時は、ミルクじゃなくてブラックでお願いします」
「苦いのが好きなんだね？　解ったよ」
おじいさんは厚いサングラスを顔に掛けて私へ笑顔を向けてくれた。あのサングラスはおじいさんのトレードマークらしい。確かによく似合っている。
「ありがとうございました。また近くに来たら必ず寄って来ます！」
「うん。でも気をつけなよ。この街に一人で居るのは危険だからね」
「んッ・・・大丈夫ですよ！」
そう言って私は店の扉を開いて外に出た。冷たい春の風が私の髪を乱暴に撫でて行く。
気分が良くなると足も軽くなる。私はその足で笹下町を回ることにした。

「・・・・・・君の様な子は特にね」

おじいさんの最後の言葉を聞く事も無く・・・――――

◆ I saw the ghost on the day1/2◇ |≪END |≫

Part1 I saw the ghost on the day2／2

赤姫が小さな楽器店から出て行くのに、時を同じくしてここは笹下駅付近。
路線端に立てられた金網のフェンスに座り込む様に倒れる1人の少年がいた。
白いラインが入った黒のニットを被っている少年は右肩を押さえている。
「くっそぉ・・・逃がした・・・んだよな・・・」
息の荒い少年は苦痛を感じているかの様に顔を歪ませて夕日の空を見上げている。
高層のビルが立ち並ぶ笹下町の空は狭く堅苦しい現実を感じさせるものだった。
「夕方かぁ・・・早めに片付けねぇとなぁ・・・チッ！」
少年はフェンスを掴んで力一杯に立ち上がり、重い足を動かして前に進んだ。
白いYシャツの右腕には一本の赤い線が見える。それは少年の肩から流れ出ている。
少年の二度目の舌打ちは路線を走る電車の音で掻き消された・・・
―――

―◇―◆―◇―◆―◇―

携帯の時計がそろそろ五時を通る。私の親は父母揃って時間に煩い人だ。
人が約束した時間は守らないくせに、私の門限となると顔色を変えて厳しくなる。
今日だってそう・・・私が誕生日だって言わなければ何もしてくれ

なかった。
仕事の時間で頭が一杯になる気持ちは嫌でも解る。一言でも声を掛けて欲しかった。

笹下駅のホームに居る赤姫は時間通りに来ない電車に軽い苛立ちを感じている。
軽い衝突事故が起きて電車は遅れて来るという。ホームの駅員が必死に説明していた。
どんな理由があるにしろ、彼女の様に遅れることへの不信感を感じる人は少なくは無い。
赤姫の隣に立っているスーツの女性は足を揺すりながら堂々と煙草を吸っていた。
この笹下駅は全面禁煙なのにと思って、赤姫は隣の女性にチラチラと目を向けている。
何回目かして赤姫は隣の女性と目が合ってしまった。女性は無言のまま赤姫に目を向けた。
人が悪そうな目が確りと赤姫を映している。赤姫が慌てて顔を前に路線側に向けると――
「せんぱぁ～い！　お弁当どれにしますかぁ～？」
――陽気な声に女はフンと鼻を鳴らしてから別の場所へ去って行った。
それを見て安心した赤姫は浅い息を吐きながら静かに肩と視線を下に落とした。
「ふぅ～・・・・・・ハッ！？」
赤姫は急に下げた視線を上げた。
低い位置にある電車の路線の上に人がいたからである・・・――――

―◆―◇―◆―◇―◆―

私は一瞬それが自分の目で見ている事だと考えることができなかった。
夕日に照らされた鈍い錆色の路線の上を私と同じ位の歳に見える女が歩いていた。
風になびく黒々とした長髪に、何かから満足感を得ている様な微笑を顔に浮かべている。
その女は服を着ていない。不気味な程に真っ白い全身が春の寒気を身に感じさせた。
「・・・・・・――――」
何よりも信じ難い事に、重々しく遅い動きを見せる女の細い足は・・・無かった。
正確に言えば彼女の腿から下は機械で切られたのか様に綺麗に切断されている。
彼女の足がまるで地面を踏み締めているかと錯覚してしまうが、その体は浮いていた。
私の見ているものが現実だと受け入れる事ができない。これは誰が見ても同じだと思う。
背筋が震えるのは私が怖いと判断している証拠だ。嫌な事に急な寒気も感じる。
どうしてなの？　どうして誰も女を見ないの？　どうして平然として居られるの？
さっきまで隣にいたあの人は路線の方に顔を向けていたのに何も言わなかった。
ホームに駅員が私の直ぐ後ろを通ったが、何の反応もないままに私の後ろを通り過ぎた。
近くにいる人達も誰1人として彼女を見ていない。まるで私だけが知っている事の様に。
「――――・・・見えてないの？」

頭の中で考えていた言葉がそのまま外に流れ出た。

これ以上は何も考えたくない。口を動かした瞬間に心臓の鼓動が速くなった。

体が震えている。寒くなってきた。動けなくなった。泣きたくなった。

私は自分で自分を認めたくなかった。怖いと思ったら家に帰れなくなる気がした。

（やだ・・・何なのアレ・・・？――）

路線の上を通っている女の動きが止まった。私の鼓動が更に早くなる感覚がした。

言葉にするまでも無く嫌な予感が私の頭の中で懸命に事を伝えてくれた。

（―動いてよ・・・私・・・――）

自分の考えに体が反応しないまま、路線の女は腕を振りながら力無く空を見上げた。

私は女の次の行動が分かる気がした。気がしただけ・・・という事にしてほしかった。

（―お願いだから・・・動いてよ・・・――）

上を向いた女はゆっくりと顔を動かした。風で乱れる黒髪が一瞬だけ私の心を揺すった。

（―イヤ・・・止めて・・・――）

路線の女の目は確実に私を捉えている。似合わない程に澄んだ瞳が私を見る。

硬直しきった私の顔から一粒の滴が垂れた。怖い。私は自分に負けてしまった。

女は完全に私の方を向いている。卑しい微笑みに赤く目立つ小さな唇から白い歯が見える。

路線の女は完全に私を見て笑っている。他の誰かでも無く私だけを見て・・・――

―◇―◆―◇―◆―◇―

女の恐怖に包まれきった私の目の前を、長い貨物列車が乱暴に通り去って行った。

「・・・・・・うわっ！？」

黄色い線より前に出ていた私は貨物列車の風圧に押されてその場に倒れてしまった。

突然として現れた列車に腰を引いてしまう。顔を流れる滴はその数を増していく。

私を見た駅員が慌てて私を起こしに来てくれた。私の意識は向こうに行ったままだった。

「あぁ・・・お譲ちゃん大丈夫？　立てるかい？」

駅員の声、集まる視線、ホームの音、私は直ぐに体を起して路線に目を向けた。

貨物列車が通った後の路線に、あの異様な女の姿はどこにも居なかった。

確認した私は胸に手をやって荒れた呼吸を落ち着かせる。周りの状況が頭に入らない。

『ンフフ・・・フフフ・・・』

声が聞こえた。極端に細く低い声が他の雑音を殺して耳に届いてきた・・・。

不安と騒音で溢れるホームの中で、その声だけが私の中に入り込んでくる。

私はもう一度路線を見た。少し夕日が暗くなった路線に女は居ない。

限界まで目を見開いている。私を見た駅員も似たような顔に成っていたけど気にしない。

私が恐る恐る真横の人溜に目を向けると、あの白い女が私を見て微

笑んでいた。
人溜に自然と混ざっている女の姿は非常に目立っていた。不気味な白が私に迫ってくる。
人と人の間を煙の様に通り抜けてくる・・・違う、実際に煙に成ってる！
魔法の様に一瞬で女の体は白い煙の塊と化して真っ直ぐ私の方に歩み寄ってきた。
その目は私を見ている。その手は私を求めている。その女は私を殺すつもりだ。
私の鈍い頭にその言葉が浮かんだ。目から大きな一滴が流れた。

その時、不思議なことに腰を抜かして動かなくなっていた私の足が動く様に成った。
立ち上がった私は遅い足を使って無意識にホームを全力で駆け抜けて行く。
「あっ・・・お譲ちゃん！？」
駅員の声を後に私はホームの階段を急いで駆け降りる。その時も駅員の声が聞こえた。
階段での勢いが余った私は遂に改札口を潜り抜けた。小さな体がここで役に立つ。
当然、他の駅員にも呼びとめられたけど「ここで止まるとあの女が来る」という考えだけが私の足をただ一心不乱に前へと押しやった。
普段の私がこんなに早いはずが無い。
駅の外にでた私は止まる事なく、再び笹下町へと戻って行くのだった・・・。

―◆―◇―◆―◇―◆―

ここが何処なのかは定かではない。少なくともビルの屋上である事は確かだ。

そこに異形な姿をした2人の男女がいた。2人は水道タンクの上に腰を下ろしている。
「――――・・・おっ！」
「どうしたんだ『イブ』？」
「どうやら、彼が動き出した様だよ『ベア』！」
白いポンチョを身に纏っている男の方が立ちあがった。頭には鹿の角の様な物がある。
その隣には黒い皮ジャンを来た女が座っている。頭に牛の角の様な物がある。
「ここまで追っては来ないだろ？」
「深手だから無理だろうね・・・ん？」
鹿角の男は何かを感じ取ると水道タンクの上を飛び降りた。
屋上にふわりと着地した男は耳に手を当てて屋上の端辺りに移動して行く。
「弱いけど他の『電波』を感じるよ・・・うん、必死に動いているね」
「そいつを食べるのか？」
「いいや、その近くに彼が・・・それと同類もいる」
牛角の女は立ちあがり男と同じ様に飛び下りた。その直後に女は一瞬にして消えた。
それに続いて水道タンクが大きな轟音を立てて潰れた。中の水が豪快に爆ぜる。
気が付くと男の真横に女の姿があった。女は静かな顔で男の横顔を見ている。
「その同類の方は強いのか？」
「弱い『電波』だね。彼とやり合った時の勝敗が目に見えるよ」
鹿角の男は目を閉じて「フフ～ン♪」とわざとらしく軽快に鼻を鳴らした。
背後の水道タンクは潰れた直後の姿を維持していた。中の水が凍り付いている。

「どうするんだ？　私達は行かないのか？」
「行かないよ。何だか面倒事になりそうな気がするんだよね～♪」
鹿角の男はそう言うと、背中を外側に向け、そのまま屋上の上から飛び降りた。
牛角の女は気にする様子も無くその場に立ち止まっている。夜風が女の髪を揺らす。
「ハァ・・・そうか。なら仕方ないな」
女は男の後を追いかけてビルの屋上を後にした――――

―◇―◆―◇―◆―◇―

「ハァ・・・ハァ・・・――――」
私は体力の限り走った。あの奇妙な女から離れる為に走り続けた。
ここが何処なのかは分からない。頭が痛くなってきた。体が重い。
女から逃げる事に支配されていた私はここで正気に戻った。
荒れた息が整うまで、私は足をゆっくりと前に動かして歩いている。
息を吸って心を落ち着かせると、頭の中にあの女の姿が鮮明に浮かんだ。
あれは一体なんだったの？　他の人には見えていなかったの？
どうして私だけなの？　あの女は私を狙っているの？
女と共に浮かんだ疑問が私の頭を蝕む。何も考えたくない。家に帰りたい。
もう駅には戻れない。あの女がまだホームに居るかもしれない。
体力が尽きた私は地面の上に肘を落とした。全身から力が抜ける。
地面に付いた両手に私の涙が零れ落ちる。――――どうして泣くの？
女が怖いから？　疲れたから？　今日が誕生日だから？　まだ子供だから？
何にも解らない。私は私を知らない・・・ううん、知りたくなかった。

今日だってそうだ。母に私を見て欲しい。父に考え直して欲しい。
小さい頃から考えてきた事。全部が馬鹿みたいだ。全部が・・・・――

「・・・おい！」

顔を上げると1人の少年が私の前に居た。右肩を手で押さえている。
黒い帽子を深く被った少年。身長は大きいけど歳は私と同じ位だと思う。
日が沈んで空に夜が現れ始めている。暗くて顔がよく見えない。
「あんた、邪魔なんだけど？」
「えっ・・・ごめんなさい――！？」
少年に言われた私は慌てて立ちあがろうとした。体の力はまだ抜けたままだった。
突然、目の前に現れた少年に戸惑った私は、泣いていた自分を忘れてしまった。
涙が出なくなった分、ホームにいた女への恐怖心が繊細になって私の中に現れた。
「へぇ・・・あんたアイツの『餌（エサ）』か？」
「アイツのエサ？　あんたこそ言ってるの？」
「あんたには、アレが見えるのか？」
私は少年の視ている方向、後ろを振り向いた。

そこには白く両足の無い女がいた。あのホームの女だ！

「みっ・・・見えるけど？」
女の顔には気味の悪い大きな笑みが浮かんでいる。その目は私を見ていなかった。
少年は何も言わず私を避けて前に出た。少年が歩いた後に黒々しい液体が零れている。

「そこでジッとしていろ。直ぐ終わるから」
「終わる・・・？」
私の言葉を無視して、少年は女の元へと歩み寄って行った。
女の狙いは私じゃなく少年だ。女は少年が来るのを見て喜んでいる。
全身を震わせて笑いだす姿は、人間離れした彼女には相応しく思えた。
少年は、そんな女の様子を気に留める事なく前へと足を動かしている。
「おい！　『滅仏士（じょうぶつし）』って知ってるか？」
突然、少年が女に向かって叫んだが、少年の言葉は女に届いていない。
その様子を見た少年は、私にも聞こえる位の大きな舌打ちを鳴らした。
「ったく！　これだから『雑魂（ザコ）』はよぉ・・・」
それが聞こえたか聞こえないか、女は態度を一変して少年に襲いかかって来た！
足の無い女は走る様に地面を素早く移動して、寸前の所で少年に飛びかかる。
「そんなぁ・・・止めてぇぇぇー！！」
その瞬間を目にした私は力の限りを絞り女に向かって叫んだ。
意味が無い事は分かっていた。でも少年が襲われるのを黙っている訳にもいかない。
それが、意味の無い事だと分かっていても・・・――――

―◆―◇―◆―◇―◆―

後ろで私が必死に声を上げている時と、女が少年に飛びかかったのは同じ瞬間だった。
白い女は少年を捕らえようと両腕を大きく開いて、少年に飛びかかる途中だった。

その瞬間、私が見たのは拳を握り大きく後方に振り回す少年の姿だった。
その瞬間、私が聞いた少年の言葉は――――

「爆仁の式！　『撃（ゲキ）』！！」

乱暴に叫びながら、少年は自ら女の元に飛びかかり、その腹元に拳を叩きつけた。
肉を叩く鈍い音が周囲に響く。苦痛で歪む女の顔が今でも忘れられない。
その次だった。少年と女の間に黒い煙が噴出する。煙の中から緑に光る炎が出てきた。
そして夜の空気に響き渡る鋭い轟音。空気が振動するのを私は肌に直で感じた。

周囲に溜まった煙の中から姿を見せたのは少年だけであった。女の姿が見当たらない。
少年の右腕から黒い煙が音を立てて噴出している。冷たい夜風がその煙を運んでゆく。
その一瞬を目にしていた私は背筋が冷えるのを感じた。焦げ臭い空気が鼻を刺激する。
その少年が私へ振り向いた。暗い夜空に浮かぶ月が少年を照らしている。
鋭い視線を放つ獣に近い目が私を捉えている。遠くからでも分かる程だ。
少年は一瞬だけ私に振り向いただけで、何も言わないで私から離れて行った。
私は片手を押さえてヨロヨロと進んで行く少年の姿をずっと見つめていた。

―◇―◆―◇―◆―◇―

それから後の事は記憶に無い。何も覚えていない。なにも知らない。

気が付けばそこは私の家の中だった。私の部屋にあるベッドの上に倒れていた。

とにかく息が荒く汗が全身から滴っている。敷涙町の駅からここまで走って来たの？

時計の針が進む音が耳に入る。私の体は酷く疲れている。とても動く気が起きない。

私は外出時の服を来たまま目を閉じた。目蓋の裏にあの少年の顔が浮かぶ・・・・―――

◆Ｉ　ｓａｗ　ｔｈｅ　ｇｈｏｓｔ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｄａｙ２／２◇　―≪ＥＮＤ≫―

Part2 I am uneasy in tomorrow1／2

ここは笹下町。空気が冷える朝方の時間帯は誰も外に出ていない。狭い商店街の裏通り。この薄暗い場所に数人の男女が集まっている。
「ハァ～！？　こんな所にも『滅仏士（じょぶつし）』がいんのぉ～？」
「この町は我々の同類が少ないと見ていたが・・・矢張りそうだったか」
数人の内の2人は、例の鹿角の男性と牛角の女性だった。
「ああ、僕と『ベア』はこの目で見たよ」
「何それ？　私もう疲れたんだけどぉー？」
「文句なら僕じゃなくて、その『滅仏士』に言ってくれよ・・・」
鹿角の男性と話しをしている2人の男女もまた妙な格好をしている。1人は言葉使いの悪い女性だった。その頭には猫の耳の様な物が生えている。
「そいつとは、一戦交えたのか？」
「ああ、中々骨のある奴だったね。歳はまだ若い方だと思うよ」
「若者か・・・それなら我々が気にする心配は無いだろう」
もう一人は無精に髭を生やした黒コートの男性。その頭は所々に白く染めてあった。
この2人以外は路地の奥側にもう1人の男性がいた。その男性は話しに入って来ない。
「ここで暫く身を隠すつもりだったけど・・・どうする？」
「お前が見つからなければ、我々は慌てる必要は無かったのだぞ」
「それは、そうだけどぉ・・・――――」
「結局『イブ』のせいじゃねーかよ！　オメェ死ねよ！！」
彼女が口悪く言うと牛角の女性が前に来て無言で彼女の服の胸倉を掴む。
服を掴まれた猫耳の女性は、牛角の女の頬に手の甲を当て、その顔を睨んだ。

その手の人差し指と中指には、マニキュアが塗られた鋭く長い爪が生えている。
「『ベア』！　『カーリー』！」
黒コートの男性の罵声を受けた2人は、何も言わず互いに少し離れた距離に移動する。
「イブ・・・見たのはその1人だけか？」
「今の所はね。『カラス』はどう考えてる訳？」
「向こうの対応しだいでは、また他の場所に移へ――」
「――そんな必要はねぇーよ！！」
突然、奥にいた男性が黒コートの男に向かって叫んだ。
グレーのキャプを被ったその男は気だるい態度で2人の元へと歩いてくる。
その男の両腕には数本の鎖が巻かれている。その鎖が動く度に音を立てた。
「見つけたら、喰えば良いだけの話だ！」
「『フェンリル』・・・いくら良い人間がいないとは言え――」
「――ビビってたら喰えるモンも喰えねぇーんだよ！　分かるか！？」
男がそう叫ぶと『カラス』は黙りこんでしまった。周りの空気に重みが増した。
『イブ』『ベア』『カーリー』『カラス』・・・そして『フェンリル』と呼ばれる男。
この五人からはその姿に相応しくない『存在感』が燦々と滲み出ていた。
「おい『イブ』！　そいつを見つけたら叩き潰せ！」
それだけを言うと男は地面を蹴って飛躍して建物を乗り越えて行った。
『カーリー』と呼ばれている猫耳の女も、男の後を追って建物を乗り越えた。
「・・・このチームのリーダーを彼に任して良いのだろうか？」

この場に残った『カラス』は『イブ』に声を掛ける。
「そもそも『ＨＵＮＴＩＮＧ×ＰＨＡＮＴＯＭ』を作ったのは彼だしね。そこは仕方ないよ」
『イブ』がそう答えると「そうか」とだけ言って路地裏の奥へと姿を消した。
「さぁ・・・僕達も行こうか。『ベア』」
『イブ』は『ベア』と共に裏路地を出て人が多い表路地へと出た。
出勤やごみ出しで外に出ている人がチラホラと見える。
周りの人達は路地を歩く奇妙２人組に何の反応を示さなかった・・・
―――

―◆―◇―◆―◇―◆―

私は今、シャワーを浴びている。全身にお湯をかけて体を温める。
あれから私はベッドの上で眠ってしまった。汗の臭いが服に染み込んでいる。
昨日の事は思い出さない様にしている。冷静になった今からしてはとても信じられない。
優しいおじいさんの後に不気味な人。とても変わった少年。訳の分からない一日。
私は暫く何も考えないでシャワーを浴びた。熱いお湯で目が覚めるだろうから。

目は覚めた。頭の中もスッキリしてきた。それでも体がダルイ。
これは筋肉痛というものだ。昨日は必死になって走ったからこうなったのだろう。
普段から運動と呼べる程の事をしていないから体中が痛くて仕方が無い。
バスタオルで体を拭いてから服を着る。そうしてリビングへ向かう。
誰も居ない。

私の家は父と母が両方とも早朝から仕事に出ている。朝は私と三匹の犬しか居ない。

「・・・・・・・――――」

キッチンの隅で固まって寝ている三匹の犬を踏まない様に歩いて冷蔵庫を開けた。

サランラップに包まれた皿の中にソーセージと目玉焼きが置いてあった。

犬を踏まない様にしてキッチンを出てレンジでそれを温めた。その間にパンを焼く。

キッチンの床にだらしなく寝ている三匹の犬は言うまでもなく家のペットだ。

三匹のゴールデンレトリバー。名前はメリーとリリーとメニー。三匹ともオス。

仕事で家を開ける事が多い両親が、可愛い動物が好きだった私の為に買ってきた犬だ。

最初は小型の犬と勘違いしていた。今くらいの大きさになって大型だと気が付いた。

レンジの音でリリーが目を覚ました。眠たい頭を私の足に寄せて来くる。可愛い。

リリーに手を伸ばしていると、オーブンに入れたパンが程良く焼けた。

上にスライスチーズを乗せて焼いたパンの香ばしい匂いで他の二匹も目を覚ます。

目玉焼きとソーセージとパン。これが今日の朝ごはん。一人で食べる朝だ。

もう何年も同じ様な朝を繰返している。食べる物も殆ど同じ物。面白みの無い朝。

犬達に餌をあげてから洗面所へ向かう。歯を磨いて顔を洗う。これも同じ。

ハンドバックに教科書と筆記用具を入れたら準備万全。靴を履いて外に出る。
まだ寒い三月の朝。私は新学期が始まる北小学校へと向かう。
これが私の朝。多分これから先も変わらない朝。これが一日の始まり。

―◇―◆―◇―◆―◇―

星ノ宮市立北小学校。略して北小。私が六年間通う小学校。
他の小学校に行った事が無いから断言はできないけど至って普通の学校。
『自由と団結』をモットーにしている学校なので合唱には力を入れている。
私は小門から校舎に入って玄関で上履へ履き替えてから新しいクラス表を見た。
私の居るクラスは『六年二組』だった。これで三年連続の二組になる。
二組には知っている人が居なかった。少し落ち込んだ私の所にチズとシキが来た。
「おはよう！・・・ってどうしたの？　そんな暗い顔して？」
ショートが可愛い『シキ』こと『涙川四季（るいかわしき）』が私の落ち込んだ肩を軽く叩いた。
「どうせ、同じクラスじゃなかったから落ち込んでるのよ」
シキと反対にロングの『チヅ』こと『安東千鶴（あんどうちづる）』が私の思考を鋭く突いて来た。
「2人と同じクラスが良かったな・・・シキとチヅは何組なの？」
「私は四組でシキが五組なの。私達はバラバラになる運命にあったの！」
「そんな怖いこと言わないでよ！」
決まってしまった事に反対を押しつける真似はしない。それでも―

――
「――最後の一年間なのにクラスに友達がいないのは辛いな・・・」
「何言ってんのよ。クラスが違うだけで友達は変わらないでしょ？」
「そうだよ！　新しい友達を作ればいいんだよ！　ね！」
親友の２人に勇気付けられた私は渋々二組へ向かった。六年の教室は最上階にある。
六階まで階段を上るのは大変だった。これから毎日上るのかと思うとゾッとする。
そんな思いで教室へたどり着いた。真っ先に視界に入ったのは窓からの眺めだった。
今まで行った事がなかった六年の教室から見る敷涙町の景色。初めて見た。
私が知っている町だけあって、その階から見た町が小さく見えるのが分かる。
私達が住んでいる町がこんなにも小さく見えるとは思ってもいなかった。
車や歩く人の細かな動き。建物の間を流れる風。町から生まれる音。
私の町の記憶。
１２歳になったばかりの私の中に、その全てが一瞬で流れ込んできた様な気がした。
もちろん気がしただけ。こんな事でこの町が理解できるハズがない・・・――――

―◆―◇―◆―◇―◆―

赤姫が顔を出している窓の反対側には北小のグラウンドがある。
風が吹く度に砂埃が宙を舞うグラウンドの中心には大きな木が寂しく立っていた。
その木は北小創設当時に植えた桜である。北小と共に時を歩んで４５年目になる。

北小のシンボルである桜を見ている一人の少年がいた。黒のニットを被っている。
綺麗な花を咲かせた桜は、風が吹く度に淡い桃色の花弁を静かに散らして行く――――

「綺麗な桜でしょ？　この学校のシンボルなの！」
「・・・・・・・――――」
桜を見上げる少年に声を掛けたのは教職員の『久美野鎖夜世（くみのさやよ）』である。
金髪に染めた頭に顔のピアスが印象的な体育教師で、この少年の担任でもある。
笑顔で側に寄る久美野に対して、少年は教師の言葉を無視して桜を眺めている。
「私はこの桜が好でね・・・矢親くんは花とか観賞するのは好き？」
「・・・・・・・――――」
余程、その桜に集中しているのか、少年から返事は返って来なかった。
そんな少年に久美野は小さな溜息を吐いた。新米の教師には荷が重い生徒だ。
久美野が少年に目を戻すと、少年は手を前に出して人差し指で下を指していた。
口を大きく動かして何かを訴えている。まるで桜に指示を出している様だった。
その行動を疑問に思った久美野は意を決して少年に声を掛ける。すると――――
「矢親くん？　何をやって――――」
「いいから、早く降りてこい！！」
少年は怒涛に溢れた声を出して桜を叱った。それ驚いた久美野は少年から後退した。
桜に話しかけている感じでは無かった。見えない何かに話し掛けて

いる方が正しい。
結果はどちらにしても、この少年が普通で無い事は十分に理解できる。

「えっと・・・矢親くん？」
もう一度恐る恐る少年に声を掛けると、それが耳に届いた様だ。
桜に怒鳴っている少年は久美野の存在に気付く。桜から目を放してこちらを向いた。
「あれ？　居たんですか？」
「さっきからずっと居たんだけどね・・・それよりさっきの何？」
「ああ、気にしないでください。独り言ですから」
等と簡単に言われても久美野はそれで事を収める気には成れなかった。
少年が喋り終わるとチャイムの音が学校に鳴り響いた。ここから学校の一日が始まる。
チャイムを聞いた久美野は携帯の時計を確認してから少年に教室へ向かうように伝えた。
「教室に戻ったら矢親くんの自己紹介と簡単な挨拶を済ませるから。緊張しないでね！」
「もう慣れてるから平気ですよ・・・――――」
そう言って少年はグラウンドを後にした。途中に何度も桜に目を向けた。
久美野は気になって少年と同じ様に桜を見たが至って普通の桜であった。
「・・・じゃあね、バイバイ！――――」
少年を真似して久美野も桜に手を振った。無邪気な童心に返った気分だった。
それに答えるはずがない桜を後にして久美野は急いで職員室へ戻って行く。
「――――バイバーイ！」

久美野は立ち止まって後ろを振り向いた。視界に映るのは砂風に揺れる桜だけ。
眉間に皺を寄せる久美野は桜の元に戻ろうとした、が、時間が迫っている。
自分の興味より職業を優先して、久美野は桜を後にして職員室へと戻る。
その後ろ姿を見ている者が居るとも知らずに・・・――――

―◇―◆―◇―◆―◇―

教室の中は新しいクラスに興奮を覚える生徒達の活気で一杯になっている。
同じクラスになった事に喜びを感じる生徒。気の合う仲間と楽しく騒ぐ生徒。
私もそうやって騒ぎ立てる方なのだが、今は静かに机に突っ伏している。
友達が居ないクラスに嫌気を指す深々とした内心が見事に態度へ表れている。
寂しいなぁ・・・チズとシキは今頃どうしているのだろうか？
「どうしたんですか？　元気ないですね？」
隣の席に座っている女子が気だるい私に優しく声を掛けてくれた。
その女子は読書中だった。私の事が余程気になったのだろうか？
「友達と別々のクラスになっちゃって・・・」
「じゃあ、それで落ち込んでいるんですか？」
セミロングに似合う優しい笑みが、私の心を軽くしてくれるのを感じる。
「う～ん・・・まぁ、そんな感じかなぁ」
「その気持ちは分かりますよ。1人になるのに慣れていないんですね」
えっ？・・・一人に慣れていない？　それってどういう事なの？

「家にいる時は何時も一人で平気だけど・・・やっぱり、学校にいる時は違うのかな？」
そうだよ。家には誰も居ない。父親も母親も私を見てくれないんだもの。
チズにシキもクラスが変わったら付き合いが無くなるのかもしれない。
私は1人という物を身近に感じている。隔離に似た感覚が私の中で渦巻いている。
「もしかしたら家に居る時は、一人じゃないのかもしれませんよ？」
彼女はそう言うと、手に持っている本を開いて再び読書に没頭した。その優しい目が『神秘と創造』と書かれた本を真剣な眼差しで見つめている。
私は彼女の言った事を詳しく聞こうと声を掛け様とした。だけど――
「――ハーイ！　みんな席に付いて！」
先生が教室に入ってきた。このクラスの担任になった久美野先生だ。相変わらず派手な頭にシャツとジャージだけの質素な格好はこの先生の特徴でもある。
去年この学校の教師になったばかりなので、この先生の事はまだ詳しくは知らない。
「えーと、六年二組の担任になりました、久美野鎖夜世です！」
この学校の先生に興味がある訳じゃないけど私はこの先生の事が少し気になっている。
先生は見た感じ明るくて元気な人だ。私は表だけでもそんな風になりたい。
落ち込んでばかりの私じゃあ色んな人から心配ばかりされちゃう。
それは嫌だ。
「私の自己紹介よりも、新しく来た転校生の自己紹介の方が大事よね！」
先生のこの一言で二組の空気に期待と興奮が加わった。転校生が来

る何て聞いてない。
そもそも新学期の転校生は、始業式に全校生徒に紹介されてから教室に来るはずなのに。
どうして始業式の前に教室に来るのだろうか？　何か特別な理由でもあるの？
そんな細かい事を気にしているのは私だけだろう。周りの生徒達はそれ所では無い。
新しい生徒の顔が気になって仕方がない様子だ。そうでも無い生徒も少数いた。
「静かにしなさい！　それじゃあ、入って来て！」
先生が教室のドアを開けた。何事も無い様な顔をした一人の少年が教室に入って来た。

その瞬間、私は声を出して驚いた。その少年は昨日の少年と同じ顔だった――

◆Ｉ　ａｍ　ｕｎｅａｓｙ　ｉｎ　ｔｏｍｏｒｒｏｗ１／２◇　―≪ＥＮＤ≫―

Part2 I am uneasy in tomorrow2／2

「ここだ・・・あの『滅仏士（じょうぶつし）』の電波を感じる」
「う～ん、適当に探して本当に見つけちゃうとはね――――」
時刻は九時を回った頃だ。イブとベアの2人は笹下町から敷涙町に来ている。
そして北小の正門前に居る。イブは大きな溜息を吐いて腰を下ろした。
「あの人の言葉は『そいつを見つけたら叩き潰せ！』だったよね？」
「そうだ。今から行くのか？」
「ええ～・・・歩き疲れたから、少し休ませてよ」
そう言ってイブは地面の上に大の字で横になった。ベアはそれを見て呆れている。
眠りに入るイブをその場に置いて、ベアは正門を飛び越えて北小の中に足を踏み入れた。
「ふぅ・・・――！？」
その直後にベアは学校から流れ出る複数の『電波』なる物を感じ取った。
一つは例の『滅仏士』。もう一つは僅かに感じる微弱な電波。そして複数の異様な電波。
「この場所は・・・そうだったのか・・・――――」
イブはこの電波が何を示していのかを一瞬で理解出した。
この地に『滅仏士』がいると言う事はもしかして・・・不安な感が頭を過る。
「だから面倒事は嫌いだよ・・・ふぁ～あ」
門の後ろで横になっているイブがそっと呟いた。ベアは校舎の中へ進みだす。
その瞬間、温かく静かな風がイブとベアの間を緩やかに吹き通った・・・――――

―◇―◆―◇―◆―◇―

私のクラスに転入生が来た。その生徒の名前は『矢親昭二（やしたしょうじ）』。
先生の紹介で教室の中へ入って来た。その歩き方からやる気が無いのは明らかだ。
灰色のニット帽の下に見える顔。人の悪そうな細目が印象的だった。
もう一つの印象は細目に出来た濃い隅。寝不足にしても尋常じゃない色をしている。
「これから一年間このクラスに入る事になったからよろしく！」
そう言ったのは先生だった。教室の反応を踏まえてわざと明るく話している。
最初は期待に胸を膨らましていた生徒達。彼が登場した瞬間その期待は泡となる。
その人を寄せ付けないと言わんばかりの表情に私達は一歩下がる思いを感じた。
周りの皆がそうでも私はそういう訳には行かない。私は彼に聞きたい事があるから。
「それじゃあ矢親くんに何か質問したい人は手を上げて。私が指すから！」
私達の反応に苦笑しながらも先生は段取りを進めて転入生への質問へと持ち込んだ。
遠慮しがちに手を上げる私達。先生はそれを見つけては生徒の名前を呼んだ。
指名された生徒は椅子から立ち上がって質問内容を言う。無理やり指名された生徒が。
「好きな食べ物は？」
「じゃあ、嫌いな食べ物は？」
「好きな事は何ですか？」
「好きなテレビ番組とかある？」

等の質問が送られた。彼は普通の答えで質問者に送り返す。それは普通だった。
質問に答えている間は、質問者から目を放して教室の隅々に視線を送っていた。
何もしないで聞いていた私は先生の「次で質問は終わり」という言葉に反応する。
私は背筋良く手を天井に突き上げた。それに驚愕した先生が興味の目で私を見ている。
先生だけじゃない。教室の中にいる誰もが私を見ている。隣の席にいる女子も見ている。
最も大きい反応を見せたのは転入生の彼だった。彼は視線を逸らす様に私へ顔を向けた。
「あの・・・えっと・・・昨日、笹下駅の近くで私と会ったよね？」
「はぁ、そんなの知らないけど？」

彼は私の顔を見ようとはしなかった。質問の答えも曖昧な答えで適当に流している。
昨日の事は思い出したくなかったが、今はそれがハッキリと脳内に浮かぶ。
彼に聞きたい事は山程ある。こんな簡単な質問にも答えてくれない様では困る。
多くの視線を浴びる中で私は堂々とした態度で椅子に腰を下ろした。
曖昧に事を流そうとする彼の態度が私の癇に障る。苛々とした感情が頭に上る。
「それじゃ・・・これで質問は終りにしようか。時間も迫ってるしね」
先生はそう言って生徒達に廊下で整列する様にと呑気な声で指示を出した。
礼をしてから2組の生徒は廊下に出た。他の組の生徒達が整列を始めている最中だった。

転校生の彼は先生に言われて1人先に体育館へと向かって行った。
そんな彼の姿が強い動物から逃げる小動物に見えた。それは少し言い過ぎだろうか？
「まぁ・・・相手が理解してくれないって時は沢山ありますから」
隣の席にいた女子に励まされた。別にそういう気持ちでは無いのだけれども。
もしかしたら、昨日と同じで顔に表れていたのかもしれない・・・
―――――

―◆―◇―◆―◇―◆―

「だ・か・ら、あの人は絶対に私の事を知ってるのよ！」
「じゃあ、何でその人は知らないって嘘なんか吐いたの？」
始業式が終わって私とチヅは体育館から教室に戻る間の廊下を歩いていた。
シキは始業式の後片付けをやっている。担当である先生の教室に入ったのが運の尽きだ。
今頃は文句を言いながら重たい鏡台を運んでいる事だろう。シキはそんな性格だから。
「隠す理由は分かってるのよ！　その部分の事で聞きたい事が山程あるし・・・」
「あの転入生と何があったのか、そこを教えてくれなきゃ私は何も言えないんだけど？」
「色々あったのよ！　色々ありすぎて訳が解んなくなる位に！」
私は昨日の事を全てチヅに話した。チヅは苦笑しながらそれを聞いていた。
分かってはいた事だけどチヅは私の話を信じてくれない。分かってはいたけど・・・
「ユイ・・・苛々しすぎて頭が変になったんでしょ。今から保健室に行く？」

「本当の事だから信じてよ！　あの人は絶対に普通の人じゃないって！」
懸命に伝えようとしてもチヅは理解してくれない。私に向けているその視線が痛い。
相手がシキだったら話は別だろう。シキはこういう話が大好きな子だから。
シキと違って現実主義のチヅに、何度この話をしても冗談にしか聞こえないだろう。
私だってこんな話をされたら信じない。でも私は実際にそれを見ている。
「変な化物が私を狙っていて、あの人がその化物を消したのよ！」
自分自身を疑う気は全く無い。私の頭は何所も変になってはいない。
「ユイ・・・仮にそれが本当だとしたら、あの転入生は一体何者なの？」
「そんなの私に聞かれても分かんないよ。普通の人じゃないのは確かだけどさぁ」
「今のユイも十分に普通じゃないけどね・・・――――」
最後まで話を信じてくれなかったチヅと分かれて私は自分の教室に急いで戻る。
チヅの五組は廊下の一番奥にある。私は二組と五組の間がとても遠く感じていた。
チヅとシキとは小二の時に一緒の教室になってから、五年間ずっと同じ教室だった。
最後まで同じ教室かと思ったらその最後は別々の教室。寂しい気分を感じる。
チヅが教室に入って行くのを見送ってから、私は自分の教室へと戻った・・・――――

―◇―◆―◇―◆―◇―

「あれ？　赤姫さんは教室に戻ってないの？」
始業式の片付けを終えて戻って来た久美野が空いた席を見て言った。
赤姫を覗いた二組の生徒は全員が教室にいる。赤姫だけが教室の中にいないのだ。
「赤姫さんが何所に行ったか知っている人はいるー？」
久美野は生徒に赤姫の行方を聞いたが、その生徒達は何も知らない様子だった。
この仕事に着いて手を焼いた経験が少ない久美野は予想もしていない事に肩を落とす。
六年生にもなってこんな事があるのか・・・というのが彼女の率直な感想だ。
「あの・・・先生！」と静かに手を上げる生徒に苦悩の目を向ける。
その生徒は転入生の矢親だった。視線を合わせると矢親は椅子から立ち上がった。
矢親の視線は久美野の顔を冷静に捉えている。小学生の目にしては随分と大人びている。
「トイレに行っても良いですか？」
「あのね・・・そういうのは休み時間に済ましといてよ。行ってきなさい」
・・・とは言ってもやっぱり小学生だ。言葉に緊張感が全くと言っていい程に無い。
そう言うと矢親はそっと教室を出て行った。廊下に荒い矢親の足音が響く。
「それじゃあ・・・赤姫さんを探しに行って来るから、それまで静かにしていてよ！」
久美野は仕方がないとばかりに顔を横に振ってから教室の生徒達に言った。
そうして久美野も廊下に出た。木製のタイルで出来た廊下は無人で静かだった。
「あれ！？・・・矢親くん？」

廊下に矢親の姿は無い。この階のトイレは不便な事に廊下の奥に設置されている。
急いで向かったにしても直ぐにトイレに入る事は不可能だ。という事は・・・・
「もぉ・・・今日は面倒事が多いな・・・――」
赤姫と矢親の2人を探す為に久美野は教室の階段を駆け下りて行った。
そんな彼女の後を付ける不穏な影には見向きもしない・・・――――――◆―◇―◆―◇―◆―

私は教室には戻っていない。ここは六階ではなく一階の玄関。
どうして私がここに居るのか。その理由を今から説明しようと思っています。
「あの・・・どうしてここに来たの？」
「お兄ちゃんに会いに来たの！　学校って広いから何所にいるか分かんないの！」
私の目の前には1人の小さな女の子がいた。この子はこの学校の生徒ではない。
黒髪を束ねてポニーテールにしている。その長い髪は動く度に左右に大きく乱れてしまう。
パチリと開いた胡桃の様な瞳は、好奇心の対象として私をじっと見つめている。
「そうなんだ・・・職員室とかに行けば何か分かるかもよ？」
教室に戻る途中にこの子に出会った。目を合わせると私の後を追いかけて来た。
私から離れようとしない。とは言っても私の側には寄ってこなかった。
少し下がった位置で私に話し掛けてくる。私が近づくとその分だけ離れる。

とても変わった女の子だった。その子の名前はまだ聞いていない。
「やだ！　人が多い所に行きたくない！」
「ここに居ても何も変わんないよ。私も教室に戻らなきゃいけないし・・・」
「一緒に居てよ！　１人じゃあ寂しいよ！」
この子は自分の思っている事をちゃんと口に出す子だ。小さい頃の私とは違う。
私はこの子に「一緒に来て！」と言われてこの場所まで付いて来てしまった。
一階の時計を見ると授業開始の時間はとっくに過ぎている。教室に戻りたい。
でもこの子はそれを許してくれない。どうしてこの子は私から離れないの？
「外に行こうよ！　あの桜の所に行きたい！」
「・・・じゃあ、外に言ったら私の言う事を聞いてもらうからね？」
女の子は素直に頷いて外に向かった。開いた玄関を抜けてグラウンドへ出た。
靴を履き替えて私は慌ててその子の後を追いかけた。そして私は桜の元に来た。
「お兄ちゃんがこれに登るなって言ってたけど・・・私はこの木が好きなの！」
「そうなんだ・・・ところで君のお兄ちゃんってどんな人なの？」
私はこの桜の木はあまり好きではない。小さい頃の自分を思い出すから。
素直じゃなかったけど、正直に物事を受け入れる事ができたあの時の自分。
疑問を持つ事が不思議に思えた。考える事を嫌っていた。そんな自分だった。
あの時の自分は消えて無くなったのだろう。だから今の自分がいる。
素直にも正直にもなれないでいる、ただ抱え込むだけの私が・・・

――――
「お兄ちゃんはね・・・強い人だよ！　何時も私を守ってくれるの！」
「良いお兄さんだね。強いって事はスポーツか何かしているの？」
「ううん。お兄ちゃんそういうのは嫌いな方だよ」
自分を変えるものは何だろう？　私がこうなった事に理由はあるの？
他と私は何が違って何が一緒なの？　私は何でこんな事を考えているの？
私が抱え込んできた疑問。誰かが答える訳でもない疑問が私の中にある。
私の中にあるものは私にしか分からない。この疑問に答えられるのは私だけ。
「ああ、違うんだ・・・じゃあ、君のお兄さんは何が強いの？」
「喧嘩は強いよ。いつもお兄ちゃんが勝ってるの！」
答えを見つける為のヒントは無い。正解も間違いも存在しない。何が疑問なの？
正解はあるの？　間違いはあるの？　正しい事なの？　駄目な事なの？
私には分からない。この何もない状況を変える事はできない。
答えを見つける事に意味があるのかも分からない。私は自分を知らない。
「でも最近は元気ないんだ・・・どうしてだろう？」
何が自分を変えて行くのかさえも私には分からない・・・――――

―◇―◆―◇―◆―◇―

私は時間を忘れて女の子の側にいた。校内のチャイムを耳にしてその事に気付いた。
女の子は私の隣で桜を珍しそうに見上げていた。その子の耳にもチャイムは届く。

「あのね・・・私は教室に戻りたいの。解ってくれる？」
「やだ！　遊んでよ！　行かないでよぉ！」
女の子は満足した顔で大きく頷いた。立ち疲れた私は小さな溜息を吐いた。
この子の相手をした事による疲労感が私の体に重く圧し掛かる。大変だった。
元気に走り回る女の子を追いかけて私も走った。私の体力と気力が極端に減っている。
二日続けて汗を掻いたのは久しぶりだった。昨日の汗より気分は良い方である。
「お願い・・・戻らないと先生に怒られちゃうの」
「じゃあ、良いよ・・・――――」
戻りたいのなら1人で戻れば良い話しなのだけど、女の子がそれを許してくれない。
少しでも離れると煩く喚き、一言「帰る」と口にすれば傲慢な態度で私を足止めする。
一番の理由を述べると、私はこの子を1人にさせる事ができなかったからである。
彼女はまだ孤独に慣れてはいない。私から離れないのもその理由からだと思う。
女の子と昔の自分を照らし合わせると、今の自分がとても惨めに思えてくる。
「えっと・・・一緒に戻る？」

―◆―◇―◆―◇―◆―

私は1人で校内に戻る気はなかった。この子も校内に連れて行く。
職員室の教師にでも預ければ後の面倒は私が見なくて済む。うん、決めた。
「いいの？　怒られちゃうんでしょ？」

「君の面倒を見ていましたって言えば、少しは許してくれるでしょ・・・」
「いいの・・・かな？」
私は女の子を連れて玄関へ向かった。私が歩くと女の子は私の後を追いかけて来る。
最初の時とは違って女の子は随分と大人しくなった。その小さな視線を覗いて。
不安を抱えている様な目で大きな校舎を眺めている。焦点がゆらりと動いていた。
「ねぇ・・・ここって何か変なのが居るよね？」
玄関へ着く前に女の子が私に言った。その声に振りかえった私も窓に視線を向ける。
「え、何の事――キャッ！？」
その時だった。校舎の窓が大きな音を立てて砕け散った。
飛び散る破片と共に大きな影が私の前に落ちた。その影の正体に自分の目を疑った。
「――・・・先生？　久美野先生！？」
窓から落ちたのは久美野先生だった。色あせたシャツが微かに震えている。
先生はまだ息がある。生きている。でも・・・どうして校舎の窓から先生が？
突然の出来事に動揺していた私を更に追い詰めたのはその後の事だった。

「ググゥゥウ・・・――――」

先生が落ちた窓から別の影が見えた。それは大きく人間離れした巨体の影だった。
何よりも私を震え上がらせたのはその異様な身体にあった。首から上が綺麗に無い。

「――・・・お前、俺が見えているのか？」
その声は深く私の頭に響き渡った。まるで・・・あの時と同じだった。
急な展開に頭が追いつかない。体が震える。動揺を抑えられない。
「久々のエサか・・・悪くは無いな」
笹下駅のホームで会った足の無い女性と同じ。あの時に感じた恐怖が私の心を蝕んだ。
その異様な影は窓から飛び降りてグラウンドの地面に着地した。巨体が近付いて来る。
「やだ、逃げよう――！？」
私は女の子の腕に手を伸ばして巨体の影から急いで離れようとした。それは無理だった。私の手が彼女に触れる事は無かった。彼女の体を通り抜ける。
「えっ・・・ウソ？」
そうだったのだ。だから彼女は私の側に寄って来なかったのだ。
足の無い女性。首無しの影。触れない女の子。訳が分からなくなった私。
私はその場に膝を付いて彼女の顔を見た。もう行動する気力は残っていない。
「逃げようよ！　こっちに来てるよ！」
女の子は慌てて私に何かを言っている。何も聞こえない。耳に言葉が入って来ない。
影はもう直ぐ側に来ている。女の子は一歩ずつ私から離れて行く。
もう私は駄目だ。
黒い影が私の真横に来た。私は震える体を必死に抑えている。横を向く気は無い。
頭の中が真っ白になる。何もかもが離れて行く。私の顔にそっと一粒の涙が流れ出た。
もう、何も分からなくなった・・・・・・――――

そう思った瞬間に不自然な風が私の体を横切った。痛々しく鈍い音が真横で響いた。
私は何もしていない。女の子も巨体の影も。私はそっと顔を横に向けた。
そこに影の姿は無かった。変わりにあったのは見たこともない姿の女性だった。
艶やかに光る黒い皮ジャンを着た女性だった。頭には白い二本の角があった。
「――――・・・大丈夫か？」
その女性が私に言った。私は何も答える事が出来なかった。今度は何なの？
見ると影は少し距離の離れた所で倒れている。この人が黒い影に何かをしたの？
「あっ！　お兄ちゃーん！」
女の子がそう叫んである人物の所へ駆けて行った。そこには『矢親昭二』の姿があった。
人の悪い視線が私の背後に向けられている。いつからそこに居たのだろうか？
「えっ・・・矢親くん？　何でここに？」
思いもしなかった登場に私は口を動かした。その声に反応したのは妹の方だった。
「やした？　お兄ちゃんの名前は『玄武』だよ？」
この瞬間がそうだったのかもしれない。話しの全てはこの瞬間から始まったんだ。
それは、私が『梵陽玄武』という人物に出会ったから・・・――――

◆Ｉ　ａｍ

uneasy in tomorrow2/2◇

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5889p/

平成ＧＨＯＳＴ★ＢＡＳＴＡＲＤ

2011年10月8日00時19分発行